
美しい山賊は、挑戦者を自分の物にしたかったようです。

古荒 瓜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美しい山賊は、挑戦者を自分の物にしたかったようです。

【Nコード】

N0772L

【作者名】

古荒 瓜

【あらすじ】

ぶつちやけ最近スランプで全然なにも書けない状態だったので、「優美なる死体」形式でお題を決めて何か書いて調子を取り戻そうと思いました。

「優美なる死体センター」様 <http://www.interq.or.jp/green/sdkfz181/old/BTG|FRAME.html> を無断で勝手に使い、一番最初に出てきた言葉をお題にしてショートショートを一本。

お題はタイトルの通り、「美しい山賊は、挑戦者を自分の物にした
かったようです。」です。

(前書き)

ぶつちやけ最近スランプで全然なにも書けない状態だったので、「
優美なる死体」形式でお題を決めて何か書いて調子を取り戻そうと
思いました。

「優美なる死体センター」様 <http://www.interq.or.jp/green/sdkfz181/old/BTG>
| FRAME.html を無断で勝手に使い、一番最初に出てき
た言葉をお題にしてショートショートを一本。

お題はタイトルの通り、「美しい山賊は、挑戦者を自分の物にした
かったようです。」です。

「へえ。お前さんがねえ。いいよ。かかってきな。掟は知ってるね。勝負は始まつたらどちらかが死ぬまで終わらない。つまり、」

真朱はあでやかな桔梗の模様の着物に身を包み、腰まである豊かな髪を無雑作に束ねている。片手で刀を弄びながら下品な色の朱を差している唇をゆがめて笑う。

「あんたが血をぶちまけて死ぬか、あたしが地面に転がるか、それとも相打ちになって二人ともお陀仏になるか、だ。いいね？」

藍鉄は緊張した面持ちで頷いた。身につけている着物はあちこちがほつれ、泥で汚れきっていて、元の色さえ判別しかねるほどであった。その顔はまだ幼く、体は真朱よりも小柄で、刀を構えている両手が震えている。髪もぼさぼさで、もちろん月代など剃っているはずもない。いかにも山賊の下働き、といった風采であった。

「ふん、始まつたらだれにも止められないんだよ、ほんとにいいのかい？」

と、にやにや笑いを貼りつけたままの表情で真朱が言う。

「勝つたら、おれが頭領だ」

藍鉄の声はかすれていた。

真朱は喉の奥でくっく、と笑うと、

「いずれあんたにはあたしの片腕になつてもらおうと思つていたんだけどねえ。そうすればこんな勝負も必要ない。あんたはあたしのもっている権力を代行し、財産の管理をまかされることになる。ここで死ねば全部がおじゃんさ。あんたに剣術を教えたのはあたしだ。百回闘つて百回あたしが勝つ。ほんとにやるつもりかい？」

す、と刀を八双に構え、おかしくてたまらない、といった口調で真朱が言った。

「殺したいだけだ」

藍鉄はそう言い、青眼に構える。

「そうかい」

真朱はそこで初めて顔から笑みを消した。

「なら、やるしかないね」

次の瞬間、藍鉄は身体ごと真朱に突きかかって行った。

真朱は構えたまま動かない。

何かの策か、と藍鉄が思う間もなく、剣先は真朱の腹に突き刺さった。

刀はあまりにも簡単に真朱の皮膚を切り裂き、肉を抉り、内臓を貫通し、そして背中を突き破った。

真朱の体に鏢まで刀がくいこむ。

真朱が刀を手放した。刀はからり、と乾いた音を立てて地面に転がった。

真朱は両手を藍鉄の背中にまわし、弱弱しく抱きしめた。

口から血があふれ出る。

涙が頬を伝っていた。

「そんなにあたしが憎かったのかい？」

うつろな声で真朱が言った。

「ああ」

「あたしはあんたを気に入ってたよ」

「おれはおまえが大嫌いだった」

真朱は藍鉄の髪をくしゃり、と握った。

「そんなにいやだったのかい？」

「思い出ただけで吐き気がする」

「昨日だってあんなにあえいでいたじゃないか」

「反吐がでる」

「悪かったねえ。ここ半年というもの、毎晩あたしの夜伽につきあってもらって」

「それも今日で終わりだ」

「なあ、あんた。子供ができてたの、知ってたかい？」

「だから、」

藍鉄は真朱から刀を引き抜いた。

「殺さねばならなかった」

真朱はゆっくりと膝から崩れ落ち、地面に這いつくばった。

「心配するな。おれもすぐに腹を切って死ぬさ」

真朱は藍鉄を見上げた。懇願するようなまなざし。

「ごどもの名前を……」

「お前の子供など」

藍鉄は刀を真朱の首筋に振りおろした。胴体から首が離れ、ごろりと転がる。

藍鉄は乱暴に自分の着物をはだけさせる。

小さな乳房と膨らみかけの腹部があらわになった。

「だれが産むものか」

彼女は自分の腹に刀を突き刺した。

了

(後書き)

実制作時間は一時間半。

さて、ノクターンで魔理沙をいじめる仕事に戻らなければ……w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0772/>

美しい山賊は、挑戦者を自分の物にしたかったようです。

2010年12月30日05時20分発行